

『東方』二八九号より

書法美学論の構築に向けて

堀池 信夫(筑波大学)

子供の頃から母親に字が下手だといわれ続けてきた。妹は今もなお、「お兄ちゃんの下手な字は我が家の恥だ」とぬかす。学生は、「おれは先生の字が読める、おまえは読めるか」といって私の字が読めるかどうかでワイワイさわいでいる。まるで暗号解読だ。

本書は「書」についての研究書である。そんな私に批評ができるのか。できない。不可能である。これは断言できる。といって威張っていてもはじまらない。

極上の書は、下手な字と同じだ。読めない。そう思えば少しは気が楽になる。そこをたよりに(?)、以下我流でものをいうことにした。

書は芸術である。それも変な芸術である。なぜ変か。それは文字文化の精髓であるからである。

芸術の本質の一つに必ずしも文字を媒介にしなくてもよいという点がある。音楽も絵画も高度の知を伝えうる知的文化であるが、しかし文字にはよらない。だが書はちがう。文字がなければ書は成立しない。

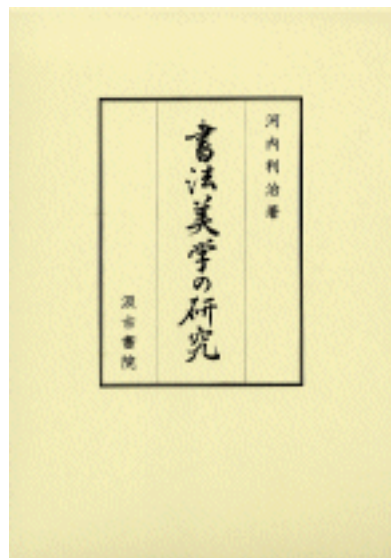
文学は文字による芸術ではないかという反論は成立する。だが、書と文学の間には深い溝がある。文学は文字(あるいは音声)の連鎖による意味情報・言語情報構築によって成立する芸術である。本来的に理性を前提とする芸術である。

音楽や絵画はそれとはちがう。直接身体にはたらきかける。理性を介在させなくとも、音楽と絵画は分かる。むしろ

河内利治著

『書法美学の研究』

A5判・三六二頁・汲古書院・一〇、五〇〇円



ろ解説的な理解は、その本来ではない。そして書の芸術性もたぶん、それらと同一線上の、身体・感覚への直接的はたらきかけにある。だが、文字がなければ書は成立しない。理性を前提としなければ書そのものが成り立たないのである。ここが書の変なところである。音楽や絵画と、それに文学ともちがって、相反する両者を同時に前提にしなければならぬという、量子力学みたいにパラドキシカルな芸術だということである。

ところで書の神髄は訓練の結果到達できるはずのものである。「行」による知、実践知ともいえる。それは、本当は知的・理性的レベルにおいては分かるはずのないものである。書の美の本質は知性・理性を越えた、その先にある。

一方、本書は書の美を書法の分析を通じて説明することを目的とし、さらにはそれを一つの学問として構築しようと試みる研究書である。著者はみずから個展を開くほどの

- ▼ 『東方』289号より
- 一 書法美学論の構築に向けて
- ▲ 堀池 信夫

すぐれた書家であるから、もちろん書の神髄は分かっている。そのところをその学問構築の試みにどう反映するか。本書は大きく二つの部分から構成される。第一章から第五章までは、本書の本論であり、主部である。書の美の本質に迫るうえでまずなされねばならぬこと、書の美にいったん理性の光をあて、書法の本質を理性のもとにもたらすための作業である。一方、第六番めの章にあたる付章は、書法美学に関する中国の五つの論説の翻訳であり、一見資料的な部分に見える。が、じつは本書においてきわめて重要な部分を形成する。というのは、それらの論説においては、書の美について知と理性においてどう説明するか、書の美の本質にいかにか肉薄するかの議論が展開されているからである。

文字はもちろん一種の符号であるが、私はそれをただ意思伝達の標識と見るだけではなく、生命あるものの形象、生命を表現する形象と見、これが書法を生み出したと考える。

(熊秉明『中国書法理論体系』)

人々は書法に対し、すでに審美の経験を蓄積してはいるものの、まだ高度な次元からこの芸術を把握できていない。熟知する事物に助けを求め、それらに作品と作品から受ける感じとの仲介をさせるという、一種合理的な選択をしている。

(邱振中『書法的形態与阐释』)

事物に対する概括や合併を加えずに、混乱する世界を把握しようとしても、それは不可能である。……〔作品の：筆者注〕感じは多くのちよつとした感覚の概括であり、それゆえ作品の具体的な構成とは厳格な対応関係が

ない。……人々はただある程度の寛容や了解によつてのみこの一連の叙述を受け入れられる。……ただ一つの場合に緩んだ論理構造があるだけである。

(邱振中『書法的形態与阐释』)

これらは書の美の理性的把握の本質的困難性をいう。にもかかわらず、書の美を論評するためにはそれを理性にもたらしなければならぬ。書の美が人類の共有財産となるためには、その作業を必須とせねばならないことを、これらの論説はいうのである。

こうした論説を承けたうえで、著者は第一章から第五章まで、書法を通じて実現される書の美を、理性の枠組において整理する作業をおこなう。そしてその作業は、じつはきわめてオーソドックスなものであった。

美というものは、それが美であるかぎり、すべての人間にとつての直接的共通性はないはずである。しかしある対象(この場合は書作品)に対して、複数の人々が美しいと感じ、美しいと認めるとき、そこには感ずるものの側におそらく何らかの類似の感覚がはたらいているはずである。その感覚を著者は概念的に「審美範疇」と呼ぶ。美の了解を共通のものとするための枠組ともいうべきものである。そして本書はその審美範疇の検討が主要な方法となる。

ただ審美範疇といつても、論理的には無限数の設定が可能である。加えて一つの審美範疇は他の審美範疇と干渉しあつてさらに複雑錯綜した概念が生成されるはずである。そこで著者は検討すべき審美範疇を思い切つて絞り込む。「骨」、およびそれに付随する、あるいは対照的な、あるいは近接する、そういったものに絞り込むのである。

「骨」は、「真骨頂」「反骨」そして「あいつは骨のあるや

▶ トップページにもどる

つだ」というようなときの、その「骨」である。そしてこの「骨」は、中国六朝時代に書概念が生まれて以来今日に至るまで、中国（そして日本）の書道史を貫く美の理念（審美範疇）の一つの中心であった。したがって「骨」の内実を通時・共時的に解明できるならば、それを「骨」幹として、広く書の美の本質を明らかにすることにつながるだろう。

第一章は「書法審美範疇語（骨）義考」という。「骨」の概念を、近年の研究を援用しつつ「筆と墨が紙に密着して力があり、突出して、内的パワーをもち、立体的であること」とあるいは「秀気があること」「馬鹿げた大げささや浮わつきがないこと」等々と規定する。その後、六朝―唐間の二十二種の書論から、「骨」および「骨力」「骨気」「風骨」等々の「骨」関連概念の記事を博搜し、それを通じて「骨」の内実を具体的に示し、その規定の正しさを実証する。「審美範疇」という概念の運用の正当性が、「骨」を通じて論証されるのである。

第二章は「書法審美範疇語（適媚）考」。「骨」と関連しつつ、またある意味では対照的な「適媚」、すなわち力強く高潔な中にも潤いのある美しさという審美範疇、およびそれから派生する優美・婉容的諸範疇が、各時代の書論を通じて検証される。

第三章は『広芸舟双楫』（骨）字術語考。清末の思想家康有為の著名な書論『広芸舟双楫』における「骨」の検討である。康有為の段階に至っても依然として「骨」が重要な審美範疇として機能していること、そしてそれがさまざまなヴァリエーションを包摂しつつも六朝―唐以来の伝統を承けるものであることが論ぜられる。著者が審美範疇の検討を「骨」に絞ったことの妥当性の証明でもある。くわえて康

トップページにもどる

有為においては、「骨」は用筆の緩急、筆管の角度、穂先の具合など純粋な技術解析の立場からも論ぜられ、さらに「骨」が意識的に「立てる」という積極的なものとなっていたことが指摘される。

第四章と第五章は、清末の書法理論家劉熙載の書品論で、とくに「骨」「筋」「力」「気」の四つの審美範疇について検討される。第一章から第三章までが「骨」を柱とする縦方向（歴史的）の研究という性格をもっていたのに対し、この第四・五章はいわば審美範疇拡張という横方向の展開を描く。

劉熙載は「骨」について、伝統を承けつつも独自の展開をみせる。内丹思想の概念「鍊形」「鍊氣」「鍊神」の「鍊」を借りつつ、「骨」が生き生きと練り上げられた状態「骨鍊」、神仙の遊行の跡のごとく謹厳なる精神をあらわす「骨裏」などの新しい概念が創出される。関連概念として、運筆が正確で節度ある「筋節」、やはり運筆の集中力としての「力塾」、洒脱ながらも雅をそこなわない「諧氣」等々、これらの章では、劉熙載が書法の審美範疇の含意をさらに拡大したことが豊富な用例によって論ぜられるのである。

書の美は作品そのものを通じて直接感ずることが、もつとも正しい享受の道だろう。だが書は文字でもある。そこには意味と、場合によっては音も、込められている。その形と意味と音の交錯するところに緊張した美が生まれる。それは二重・三重の対位法的交響であり、率直な直観のみではこぼれ溢れてしまうところがある。芸術の鑑賞・論評というものは基本的に主観的なものであつてよいのだろうか、研究という形を取るならば、そこには研究に参与するものの間に何らかの共通理解の可能性が担保されていないければならない。書の研究において、そういったところを理

性にもたらず回廊となるものの一つが、書法である。そして本書は書法を審美範疇という概念をもちいて分析することを通じて、美の内包に一定の共通理解をもたらすことを企図したものであった。それが著者のいうところの「書法美学」である。そして審美範疇の有効性は、本書における具体的議論においてある程度実証されている。著者の企図する「書法美学」という学問構築への第一歩は、確かにここに刻まれている、といえるだろう。

（筑波大学）

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる